

平成30年7月の現況と8月の対策（野菜）

現況 (30年7月20日現在)

1 施設野菜

果菜類

(1) トマト

半促成栽培は、福井、南越地区では7～8段果房を収穫中で、早い圃場では収穫終了している。

若狭地区の越夏栽培は、10段果房を収穫中である。

うどんこ病が少発、灰色かび病が少～微発、コナジラミ類が一部中発、アザミウマ類が局微発である。

坂井北部丘陵地の抑制栽培は、育苗中である。

若狭地区の越冬栽培は、6月7日に定植され、草勢は強めに推移している。

(2) ミディトマト

半促成栽培は、福井地区では出荷終了、坂井、南越、若狭地区では5～8段果房を収穫中で、高温により草勢が低下している圃場がある。

奥越地区の夏秋栽培は、12段果房が開花し、3～4段果房が収穫中である。

灰色かび病、葉かび病、うどんこ病が微～少発、トマトサビダニ、コナジラミ類が局微発である。

福井、坂井、南越、若狭地区の抑制栽培は、6月上旬～7月下旬まで順次定植されており、早いもので3段果房が開花となっている。

坂井、二州、若狭地区の促成長期どり栽培では、7月下旬～8月上旬にかけて定植される。

(3) キュウリ

半促成栽培は、南越地区では7月5日に、福井地区では7月6日に収穫終了している。二州地区では7月末まで収穫見込みである。

抑制栽培は、福井地区では7月31日に、二州地区では8月上旬に定植予定である。

(4) スイカ

三里浜砂丘地、坂井北部丘陵地では7月上旬に出荷終了した。

(5) メロン

アールスメロンの半促成栽培は、坂井北部丘陵地では大雪により播種が遅れたため、7月2日（昨年より3日遅い）から収穫が始まった。品質は良く、2L～3L中心の玉揃いとなっている。抑制栽培は、三里浜砂丘地で6月10日から、坂井北部丘陵地で6月15日から順次播種が行われ、6月下旬から定植されている。梅雨明け後の急激な高温により、葉焼け症状が出ている圃場もある。

坂井北部丘陵地のアンデスメロンは、6月17日から出荷が始まり、継続出荷中である。

アブラムシ類が一部少発である。

マルセイユメロンは、坂井北部丘陵地で6月3日～7月中旬、三里浜砂丘地で6月10日～7月上旬にかけて出荷された。南越地区では、7月12日に出荷終了している。

葉根菜類

(1) 軟弱野菜

福井地区では、6月上旬播種のハウレンソウが約30日で収穫中である。高温で生育が抑制されている。

(2) 青ネギ

若狭地区の周年水耕栽培は、5月下旬播種が57～60日で収穫となっている。高温のため生育が緩慢になってきている。

2 露地野菜

果菜類

(1) スイカ

三里浜砂丘地では、7月4日から出荷が始まり、高温により熟期が早まっている。坂井北部丘陵地では、7月9日から出荷が始まっている。

南越地区では、7月30日から出荷開始予定である。

炭そ病が少～中発、つる枯病が一部中発、菌核病が微～少発、アザミウマ類、オオタバコガが少発である。

(2) カボチャ

坂井北部丘陵地では、7月7日から収穫が始まっている。

うどんこ病が一部中発である。

(3) ナス

奥越地区では、4月下旬定植で主茎長120cm程度で昨年並みの生育となっており、継続収穫中である。

うどんこ病が微発、アザミウマ類、チャノホコリダニが中発、カメムシ類、タバコガ類が少発、ヨトウ類が微発である。

(4) ピーマン

奥越地区では、5月中旬定植で草丈は65cm、第8～9果房開花で継続出荷中である。

丹生地区では、4月下旬定植で草丈は73cm、第12～13果房開花で第6～7果房を収穫中である。

尻腐れ果が微発である。

(5) スイートコーン

福井地区では、永平寺町で7月3日(平年より約3日遅い)から出荷が始まっている。旧清水町では、4月下旬定植で7月4日から出荷された。アザミウマ類、アブラムシ類、アワノメイガが少発である。

(6) エダマメ

二州地区では、移植栽培は7月上旬から収穫が始まっている。直播栽培は莢肥大期となっている。高温が続いているため、一部で畝間かん水を実施している。

(7) キュウリ

丹生地区では、5月下旬定植が収穫中である。

アザミウマ類が少～微発、斑点細菌病、アブラムシ類が微発である。

葉根菜類

(1) ブロッコリー

春植え初夏どりは、南越地区では7月中旬でほぼ出荷は終了した。

夏植え秋冬どりの播種が、南越地区では7月10日から、福井地区では7月13日か

ら始まり、8月上旬から定植開始予定である。

(2) ネギ

4月上旬定植では、県内の各地区で、葉鞘径が18～28mmである。

4月中旬定植では、奥越、若狭地区で、葉鞘径が16～20mmである。

4月下旬定植では、坂井、二州、若狭地区で、葉鞘径15～20mmである。

5月上旬定植では、福井、若狭地区で、葉鞘径が12～15mmである。

5月中旬定植では、福井地区で、葉鞘径が10～12mmである。

5月下旬定植では、福井、坂井、若狭地区で、葉鞘径が7～10mmである。

6月上旬定植では、若狭地区で、葉鞘径が9～11mmである。

白絹病が少～中発、軟腐病が少発、さび病が微～少発、萎凋病が微発、アザミウマ類が中発、ハモグリバエ類が少～中発、ネキリムシ類が微発である。

奥越地区の越冬どりは、自家育苗が7月下旬から定植開始となっている。購入苗は8月2日に苗を配布する予定である。

(3) キャベツ

坂井地区では、越冬初夏（5～6月）どりは6月いっぱいまで収穫終了した。春植え初夏（6月）どりは、7月13日まで出荷された。

夏植え秋冬どりは、坂井北部丘陵地で6月20日から播種が行われ、7月15日から定植されている。県内の各地区の水田地帯では、6月27日から播種が順次行われている。

根菜類他

(1) タマネギ

福井地区では7月1日で、坂井地区では7月10日で収穫終了している。ともに、小玉傾向であった。

(2) ラッキョウ

3年子は6月3日から出荷開始で、7月末まで続く見込みである。

(3) カンショ

坂井北部丘陵地では、定植作業がほぼ平年どおりに終了した。イノシシによる定植後の苗が掘られる等の被害が出ている。

(4) サトイモ

奥越地区では、主茎長100cm、生葉数6～7枚と平年並みの生育である。少雨のため、畝間かん水を実施している。

(5) ニンジン

三里浜砂丘地では、6月24日から収穫が始まり、7月下旬に終了見込みである。

夏まき秋冬どりは、坂井北部丘陵地で7月27日頃から播種開始予定である。

対 策

8月は高温傾向と予想されており、引き続き高温時の肥培管理に留意する。施設内においては、寒冷紗による遮光や敷きわらを厚くするなど地温の低下に努める。特に、猛暑日が続く場合は、高温障害の恐れがあるため発生防止策を立てておくとともに、露地作においても干ばつ害に対する予防策に万全を配しておく。また、害虫の発生も増加することから、早期に発見し防除に努める。

なお、秋冬野菜については、圃場準備を計画的に進めて、適期播種・適期定植に努める。日中のハウス内での作業は40℃を超えることがあるので、管理作業は涼しい時間帯に

行う。無理な作業は絶対に避け、水分補給や十分な休養を取って熱中症を回避する。農薬散布を行う場合は、日中の高温時を避けて、早朝または夕方の涼しい時間帯に行う。

1 施設野菜

果菜類

(1) トマト

高温による生育停滞や着果率の低下を防ぐため、ハウスのサイド、肩上部、妻部、連棟の谷部等を大きく開放して換気を十分に行う。特に、高温になる日中の時間帯には、遮光を行い気温の上昇を抑える。しかし、過度な遮光はトマトを徒長させ、花質を悪くするので留意する。

抑制栽培では、過繁茂の防止と根群発達を促進させるため、かん水は定植後から3段開花頃まで控えめにするが、萎れさせないよう適宜かん水を行う。果実肥大が始まる3段開花頃になると、着果負担が増し、草勢が急激に低下しやすくなるので、追肥、かん水を積極的におこなうとともに、遅れないように留意する。ホルモン処理は空洞果の発生を防ぐため、1段花房につき3～4花咲いた時に、夕方トマトトン100倍にジベレリン5～10ppmを混用して噴霧する。さらに、高温で害虫発生が多くなるので、防除を徹底する。

(2) ミディトマト

高温で果実の成熟日数が短いため、3段花房開花頃から節水管理に努める。ただし、高温下では草勢確保がしにくく、土壌の乾燥による尻腐果の発生も出やすくなることから、極端な節水管理は避け、草勢や開花状況を見ながら地温の低い早朝にかん水する。軟化果の発生は、高温時に多発するため、ハウス換気や遮光により果実温度を下げる。

また、白ぶくれ症果、金粉症果の発生はアザミウマ類やハダニ類が関与するため防除を徹底する。

(3) メロン

開花期まではやや控えめなかん水として根群の発達を促し、収穫前の極端な草勢低下を防ぐ。着果後はかん水を増やし果実肥大を促す。ネット発生がみられたらかん水を控え、ヒルネットの発生を防ぐ。さらに、ネット発生盛期には再びかん水量を多くして果実肥大を促すとともにネット発現を良くする。なお、高温のためネット発現が弱くなりやすいので、ネット発生前にはハウス換気を十分に行って果実の硬化を図っておく。また、うどんこ病、アブラムシ類等の病虫害防除を徹底する。

軟弱野菜

(1) ホウレンソウ

高温期は立枯病等の発生が多くなるので、播種時に十分にかん水し遮光を行って地温を下げる。なお、遮光は土壌の乾燥による発芽不良や生育遅延を防ぐ効果はあるが、ホウレンソウの生育が軟弱となるため播種密度を下げて徒長を防ぐ。また、高温時の収穫は適期幅が短いので、収穫労力を考慮して段播きとする。一方、作付けしないハウスでは高温を利用して太陽熱土壌消毒を行う。

(2) コマツナ

コナガ、アオムシ、キスジノミハムシ等の害虫は、ハウス出入り口やサイドに寒冷紗等を張ることで防止する。また、徒長防止のため播種密度を下げる。

2 露地野菜

果菜類

(1) ナス、ピーマン

敷きわらを厚くすることで高温による根の衰弱を防ぐとともに、適宜にかん水や追肥を行うことで草勢の健全維持を図り、つやなし果、日焼け果、尻腐果等の発生を防ぐ。高温期は、常に畝間が湿っている程度の土壌水分が必要であるが、かん水は夜間地温が下がってから畝間に入水する。畝の2分の1程度の高さまで湛水したら直ちに落水する。

また、接木苗を使用しなかった場合は、青枯病の蔓延が懸念されるので畝間かん水は避け、かん水チューブ利用等によるかん水を行う。また、ハダニ類、アザミウマ類等の害虫の発生も多くなるので、誘引・整枝・摘葉を徹底して、薬剤散布の防除効果を高めるとともに、健全な樹体を維持し、果実品質の低下を防ぐ。

(2) キュウリ

根の分布が浅いことから、敷きわらを厚くして高温による根の衰弱を防ぐ。追肥、かん水を適宜に行って着果負担による草勢低下を防ぐ。

なお、かん水は夜間地温が下がってから畝間に湛水し、直ちに落水する。

古葉や込み合った葉は適宜に摘葉し、べと病、褐斑病、斑点細菌病、うどんこ病等の防除を徹底する。

葉菜類

(1) ブロッコリー、キャベツ

水田転換畑では、ゲリラ豪雨や台風による大雨が、圃場の排水不良と相まって生育不良、品質低下につながっている。このようなことを避けるため、圃場内の排水対策を十分に行っておく。また、耕うん・整地作業はできるだけ碎土率を高め、定植後の活着促進や除草剤効果が十分に発揮できるようにする。

定植は、午後気温が下がってから行い、根鉢が隠れる程度にやや深めに植え付け、直ちにかん水を行って乾燥を防ぐ。活着するまでは圃場が乾燥しないように管理する。

なお、除草剤は土壌が湿っている時に、乳剤を散布するのが効果的である。害虫対策は、育苗期後半時にセルトレイに灌注する農薬が省力かつ予防効果が高いため積極的に活用する。

(2) ネギ

猛暑日が続くと、ネギの生育は停滞するため、土寄せは生育状況を見て判断して行う。ただし、高温時に土寄せをする場合、軟腐病の発生原因になるので、事前に粒剤などで予防散布を行っておく。また、高温乾燥が続くとアザミウマ類や軟腐病等の病害虫の発生も多くなるため、早期徹底防除に努める。

根菜類

(1) ダイコン

高温によって生育不良や根部の生理障害が発生しやすいので、8月下旬に温度が下がってから播種する。早まきを行う場合は、ウイルス病の発生防止のため寒冷紗等による被覆を行う。また、圃場は深耕し、碎土率を高めて排水や通気性を良くしておく。なお、施肥直後の播種では曲がり根や岐根が多くなるので、早めに圃場準備を済ませておく。播種時には殺虫剤を施用して害虫の初期防除に努める。

(2) ニンジン

圃場の準備は、プラソイラー等で排水対策をしっかりと行い、特に収穫機を利用する場合は、必ず施工しておく。発芽率を高めるため、耕うんはできるだけ細かく碎土し均平

にしておく。播種前には、センチウ類対策として殺虫剤を土壌混和しておく。

そして、播種後、かん水は土壌水分が十分確保できるように、風向きやかん水チューブのねじれ、詰まり等に注意しながら行う。

圃場の乾燥が続くと、肥大や品質に影響がでるため、早朝か夜間に畝間かん水を行い、畝間が白く乾かないように努める。ハダニ類、アブラムシ類、セスジスズメ等の害虫の発生が予想されるので防除を徹底する。